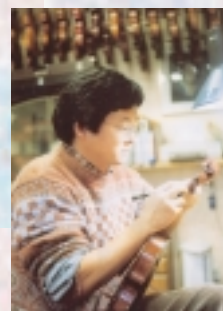


弦楽器の基礎知識

- 1) ニス
- 2) 魂柱
- 3) 駒
- 4) 弦
- 5) にかわ 楽器の接着剤
- 6) 楽器の調整
- 7) ラベル
- 8) 楽器の値段



外国ではたくさん楽器に関するよい書物が出版されています。彼らはプロ、アマ、学生を問わず楽器について分別のある価値観や取り扱い方に興味を持ち、管理できている人が多いです。しかし日本に帰ってから驚いたことには弦楽器に関して無知な人があまりにも多く、考えられないようなおかしな知識が氾濫していたり、楽器の知識が未熟な人によって起こった事故を数多く見てきました、楽器の取り扱いに自信のない人はまず読んでください。



ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作

イチイ ヒロキ
Violin Workshop

弦楽器の基礎知識

1) ニス

弦楽器は、ヨーロッパの長い歴史と文化のもとで発展してきました。私はフィレンツェでヴァイオリン製作をしていましたが、高級な古い家具の修理などの仕事も頼まれたことがあり、ヴァイオリンの頭の形やパフリングやf孔のデザインと家具との親密性を感じたことが多くあります。美しい曲線によって作られたテーブルの回りにパフリングの入った物や、幸運にも保存されていた17世紀の北イタリアの家具の中に健康状態の良いストラディヴァリのニスと同じような物を見かけたりもしました。古い楽器が当時の家具作りと同じ技術によって作られていたわけです。ところが近代の木工芸品などは工場で大量に安く作られ、多くの仕事は機械によってなされ、接着剤、吹き付けの堅牢なニスが多用されています。

ニスに関して書くなら本が一冊書けるので、今それについて詳しくは述べませんが、ストラディヴァリが使っていた時代のニスの成分は年月とともに酸化してしまって、現代の発達した科学を使っても解明することはまだできないのです。しかしなぜその後そのニスが使われなくなったのかに関して、一つ興味深い理由があります。17世紀の終わり頃シェラック (gomma lacca 伊) という樹脂が輸入されはじめ、ヨーロッパの間でも使われ始めました、なぜならば以前に使われていたニスより使いやすく、しかも丈夫で値段も安かったからです。18世紀から19世紀にかけての楽器作りや家具屋にとっては、大変便利だったわけです。不幸にも18世紀の半ばからクレモナでもこのニスが使われはじめ、たくさんの楽器が台無しになってしまいました。ニスは年月がたつにつれて変化していきますし、材木の繊維の結晶化が進んでいきます。できたときの楽器が良くても200年後のニスによる弊害を予測するのは困難だったのでしょう。近代になってから楽器作りがそのことに気づき始めたわけです。

おわかりになったと思いますが、楽器は敬意ある歴史と文化の遺産です。300年前の技術で楽器が未だに作られているのは、それなりの理由があるのです。楽器のニスは大変デリケートです。ウイスキーの一滴でもニスを損なうことがあります。楽器は、掃除一つにしても現代の家具と同じようにはできません。洗剤などは絶対使わないで下さい。化粧品に使用されている成分にもニスに影響を与えるものが多く使われています。熱にも弱く、暑いところに置いておくとニスが溶けたりします。急激な温度や湿度の変化には気を付けてください、割れやはがれの原因の一つです。特に日本の夏は湿度が高いので注意が必要です。

最近の事例から：

(事例) モダンイタリアの楽器(オイルニス)に、弦楽器専用として販売されている磨きオイル(イダオイル)を使用して、ニスの表面全体が白濁した。(理由と対策) この磨きオイルにはテレピン湯が含まれていると思われ、多用するとニスが溶け、白濁する。こうしたたぐいの商品はよく注意して購入し、多く使すぎないこと。万一トラブルが起こったら、専門の職人に任せましょう。

ポリッシュ、オイルについて

楽器みがき用のいわゆるPolichやOilなどが販売されていることがまれにあります。これらは高価な楽器にはどれもおすすめすることはできません。目的などによっていろいろな成分の配合が存在しますが多くの場合磨き粉とワックスの成分が含まれていることが多く、これらを使用すると楽器がきれいになったように見えますが楽器表面を磨き粉で傷つけて本来ニスに使われないはずの成分(ワックス)をニスの表面にのこしているのです。使い続けるとニスに害がありますし、暖かい日など汗などでニスの表面のワックスがとれて表面の艶がなくなって汚くなってしまったりします。また溶剤が含まれているものは溶剤の質、量、また楽器のニスによっては、ニスが汚くなることもあります。楽器修理職人は溶剤がかなり多く含まれている物を使いますが、それなりの知識と熟練した腕と経験が必要ですので一般の方はまねしないでください。

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作



イチイ ヒロキ

Violin Workshop

〒602-0825 京都市上京区寺町通今出川上ル表町31
Tel. 075-251-0724 Fax. 075-251-0726
e-mail: hiroki@violin-workshop.com
<http://www.violin-workshop.com>

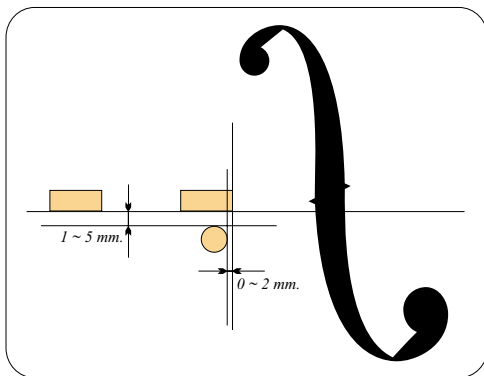


弦楽器の基礎知識

2) 魂柱

あなたは、ご自分の楽器の鳴りに十分満足されていますか？E線が鳴らないとか、G線が鳴らないとか、G線の音が弱いとか、音色が固すぎるとか・・・もちろん楽器自体の性質によってそれぞれ本来の音色はちがうのですが、駒や魂柱を調整することによって、驚くほど改善されることがしばしばあるのです。そこで、今回は、「魂柱」のお話をしましょう。

魂柱は駒の向かって右足の下に立っていて、右側のf孔からのぞけば見える直径約6mm（ヴァイオリンの場合）の丸い棒です。立っている位置をわずか1mmでもずらすと、楽器の音がずいぶん変わります。魂柱は表板と裏板の圧力だけで立っていて、簡単にずらすことのできる物なのです。あなたの楽器の魂柱の位置はあなた自身の手によって確かめることができます。簡単な方法を書きますと、名刺の厚さくらいの紙切れをf孔から下の図のように魂柱にコツンと当たるまでそっと入れてみて下さい。駒の足からの距離を木目に直角方向と平行方向に計るわけです。



左の図は駒の足と魂柱の位置関係です。図の通り駒と魂柱の間はヴァイオリンの場合約1～5mm（チェロの場合約5～12mm）、駒と魂柱の右側が縦に揃っている状態（チェロの場合約5mm左側）が標準的な位置です。（人によって多少見解が異なります）

また、魂柱自体の長さを変えただけでも音が変わります。ときに、魂柱をずらした際、楽器がその魂柱の位置になれるまで日数がかかったりします。魂柱の位置を決めるに当たっては楽器の性格を考慮した上で考える必要があるため一概には言えません。それに楽器の性質も年月とともに少しずつ変わっていきます。ですから理想的な魂柱の位置も変化していくものと考えられます。職人の立場としては、演奏家の皆さんに満足いく調整をするためには、長年の経験によって鍛えられた耳と、センスが必要な仕事のうちの一つでしょう。

楽器の調整をしていると、時々、魂柱の位置があまりにも悪かったり、表板と裏板にぴったりと合ってなかったり、軸が回ってずれていたり、ひどいときには魂柱の木目の方向を間違えて立ててあったりします。そのような魂柱であれば楽器が正常に鳴らないのも当然といえるでしょう。場合によってはきちんと作られていない魂柱を使ったために、表板の裏側が傷ついている楽器を見ることも希ではないのです。

魂柱を動かすのはやはり信頼のできる職人に任せの方がよいでしょうが、ご自分の楽器を一度チェックなさってみてはいかがでしょうか。魂柱の大切な条件は、位置、長さ、太さ、それに表・裏板との接触面がピッタリあっていることです。

前回にも述べた通り、魂柱の位置によって音が変わりますが、魂柱の長さや太さによっても音は変化します。一般的に、魂柱を駒に近づけると音が大きく硬くはっきりしてきます。逆に遠ざけると柔らかくなりますが音が弱くなり、遠くに響きにくくなります。また、恐ろしく単純に言えば、魂柱をf孔の方にもってくと高音が良く鳴り、中央に近づけると低音が良くなります。この横方向の移動についてはいろんな条件が複雑に関係し、本当は一概には言えないのですが、また、魂柱を長くすると高音が良く鳴るようになりますが音が堅くなります。

魂柱を動かすときに、一つの条件を変えるとほかの条件も変わってくるので、同時にたくさんのことを考慮しなければなりません。また例外も多いのです。と言ったわけで、魂柱を調整するのは、駒や楽器自体の作りを考慮に入れながら、経験とセンスをもって行われなければなりません。楽器も年月によって鳴り方が変わってきますし、演奏家が楽器に対して持つ要求も演奏が上達すると共に変わったりするでしょう。ヴァイオリニストとしての経験を生かしながら楽器を調整していますので、お気軽にご相談下さい。

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作

イチイ ヒロキ
Violin Workshop

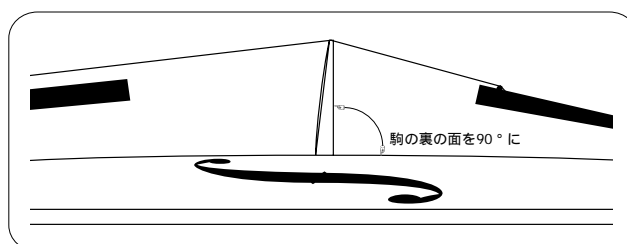
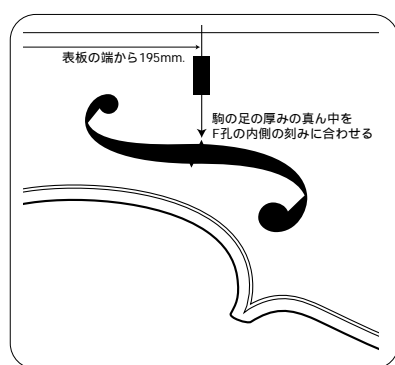
〒602-0825 京都市上京区寺町通今出川上ル表町31
Tel. 075-251-0724 Fax. 075-251-0726
e-mail: hiroki@violin-workshop.com
<http://www.violin-workshop.com>

弦楽器の基礎知識

3) 駒

駒には色々な形があり、それぞれに特徴がありますが、今回はそれらの個々について述べることは割愛し、いずれにも共通した基本的で大切なこととお話します。

まず、駒の位置ですが、左右のf字孔の切れ込みをつないだ線上に駒の足があるのが正しい位置です。そして指板の頭の方からながめて、駒が中央にあり、また表板に対して駒の裏面が垂直に立っていることが必要です。この三方向からの位置確認を絶えず行い、駒がおじぎをしないよう注意して、いつも修正する心がけをしてください。駒を少し動かすときは、テールピースの下に柔らかい物をひいて、弦をある程度ゆるめ、弦と表板の間に指を入れ（こつです）、駒が急にバチンと倒れないように注意しながら、少しずつ修正して下さい。



駒の厚さは、一般的に薄くすれば、高音までリスパンスのいい抜けのいい音になりますが、あまり薄くしすぎると、かえって貧弱な音色になってしまいます。とくに楽器の表板が平坦な（フラットな）楽器ではこの傾向が強いようです。また、駒の材料としては、古くて硬いものが良い結果を生むようです。（古いというのはおわかりだと思いますが使われて古くなった物ではないです）

駒を製作する際、表面から削りを入れて厚さの調整をしますが、裏面からは削りません。また、駒の足は、楽器の表板にあわせて曲面にピッタリと合うように削ります、チェロの場合は弦の圧力で足が1ミリほど開いた状態で。駒の頭の曲線や糸溝の幅は、演奏しやすいように作りますが、この微妙なニュアンスは、職人にも演奏家としての経験があれば最高です。

一つ一つの楽器に合わせて入念に作られる駒。変形しないよう、いつもチェックをお忘れなく。

弦楽器の基礎知識

4) 弦

弦にはたくさんの種類があります。楽器の音色は使われている弦によって結構左右されます。しかしあまりにもたくさんの種類があるので、弦選びにお困りの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。売られている弦のパッケージを見ると、メーカーや商品名は、大きく書かれています。物理的な構造の違いなどはスミの方に小さく、しかも外国語で記されています。初めて見る人や初心者の人にわかりにくいのも当然のことです。しかし、弦の特色を知ることは演奏家としての最小限の知識であり、楽器の特性を最大に引き出すためには重要な事です。

弦を構造的な違いから区別していきましょう。まずヴァイオリンの場合一番線にスチール以外の弦が使われることは古楽器をのぞいては無いので考慮外です。弦は大きく分けて、ガット弦（羊の腸で出来ている）とナイロン弦とスチール弦（金属）の3種類に分けることが出来ます。外から見える部分でなく、実際に張力のかかる心線の材質で決まります。楽器の構造や演奏の形態が時代と共に変化してきたのと同様に、弦も様々な改良がくわえられる事により、色々な種類ができてきました。オリジナルの弦は、裸のガット弦でした。さらに大きな音を出すために金属が回りに巻かれるようになり、そしてスチール弦ができ、さらにスチール弦に金属線を巻いたり、またガットの代わりにナイロンを使用する弦が出現しました。今でも様々な合成繊維が弦のために開発されて行ってますし、金属でもタングステン合金の弦もよく見かけるようになりました。

では、実際に弦を選ぶときはどの様にすればよいのでしょうか？ 楽器の特徴や演奏家の腕も、弦を選ぶときに考慮しなければなりません。一般的にヴァイオリンですと年月の経った楽器は、ガット弦の方が独特の美しい音がすることも多いですが、近代の楽器や大きな音を出したい人、また発音の良い音をのぞむ人は、ナイロン弦を使用する場合があります。初心者の場合、ガット弦は湿度や温度に敏感で狂いやすいので、調弦の都合上扱いやすいのは、スチール弦がもちいられます。またチェロの場合は、ガット弦やナイロン弦では音が弱々しくなりすぎるので、スチール弦が好まれています。

具体的に弦のメーカー名と種類の名前を並べてみましょう。古くから大手のメーカーであるピラストロ社の場合、オリヴ（Oliv）、オイドクサ（Eudoxa）などがガット弦で、シノクサ（Synoxa）、トニカ（tonica）などがナイロン弦、そしてクロムコア（Chromcor）はスチール弦です。また、ウィーンのメーカー・トーマステイク社の、ドミナント（Dominant）はナイロン弦。スピロコア（Spirocore）はスチール弦です。そのほかにもたくさん弦を作っているメーカーがあります。その上同じ名前の弦でも、太さなどに変化を与えて細かく種類分けされています。例えば、ピラストロのオイドクサのA線は、7種類の太さがあり、（13 3/4）などと書かれているのがそれです、もっとも普通標準的な太さ以外の弦を見つけることは困難ですが。一般的によく見かける表記方法ではweich, dolce, soft, lightが細めで mittel, mediumが標準。stark, forte, strongと表記されているのが太めです。英語であったりドイツ語であったり、フランス語、イタリア語様々な言語が使われてます。

弦について質問がある方や楽器との相性などに疑問があたりの方は演奏家、楽器製作家としてアドバイスさせていただきます。

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作

イチイ ヒロキ
Violin Workshop

〒602-0825 京都市上京区寺町通今出川上ル表町31
Tel. 075-251-0724 Fax. 075-251-0726
e-mail: hiroki@violin-workshop.com
http://www.violin-workshop.com



弦楽器の基礎知識

5) ニカワ (膠) 楽器の接着剤

使い捨ての品や工場製の安価な物品が普及した今日では洋の東西を問わず、特に日本では、ニカワはあまり知られていません。また、西洋でも、使われることが少なくなった物の一つでしょう。しかし弦楽器に使われるニカワにはたいへん深い歴史と役割があるのです。皆さんの手元にある弦楽器を子供の玩具にしてしまいたくない人は、よく読んでください。

ニカワの成分はゼラチンです。魚や、動物の皮や骨が原材料です。基本的には同じ物ですが、何から取るかによって、性質が少しずつ違い、対象によって使い分けられたりします。イタリアでは金箔を張るための石膏に使うのは兎の皮のニカワです。一般に市販されている石膏にはセメントのように水分を吸って時間が立つと固まるように混ぜ物がされていますが、本来石膏はニカワで固められていてお湯の中に付けておくとまた柔らかくなる物だったのです。家具の修理には、一般的に骨のニカワでしょう。イタリアで弦楽器修理には、ケーキを作るために売られていて、魚から作られるゼラチンが手に入りやすく、精密な仕事に向いているので使っている人も多いです。日本では薬屋さんでゼラチンを買うと言った手もありますが、まだ画材屋で売られている粒又のニカワの方がよかったです。

使い方は一晩ほど水に漬けた後適度に暖めると、コロイド物質ですので流動性があり、冷えるとゼリー状になり、水分を失うと木の繊維どうしをくっつけるわけです。弦楽器に使う場合には、一般工芸品の場合より薄めにします。特に表板などよく剥がしたりするところは特に薄く付けてないと次に剥がすときに丈夫になりすぎてうまくはがれず楽器にひびが入ったりします。安物の楽器などには、濃いニカワがどっさり付けてありますが、本当はよくないことです。ましてボンドを使うのはもってのほかだということがおわかりでしょう。(ときどきこれでわたしは、大変苦労しています・・・)

ニカワは、付けたり剥がしたりが自由にできる代わりに、現在一般に使われる接着剤よりも接着力は強くなく、しかも湿度や温度の変化に敏感で、古くなると剥がれやすくなります。もし楽器の接着部分が剥がれたりしたときは、古いニカワをお湯に浸けた、少し硬めの筆で除去した後(木がお湯で濡れてふやけすぎないように注意)、新しいニカワをいれて軽くクランプで締め付けます。そして、はみ出したニカワを乾かないうちにさっと筆で取り除いておくのもコツです。乾いても水でぬらすと徐々にふやけゼリーのようなになるので取りのぞくことができます。

基本的にはちっとも難しい作業ではないので、少し練習すれば誰でもできるようになりますが、経験が少ないと思いがけない事故が起こったりするので、大切な楽器は専門家にまかせましょう。

弦楽器の基礎知識

6) 楽器の調整

弦楽器は木でできているため、長年の間に少しずつ変化し、多かれ少なかれ演奏上の不都合が生じてきます。その時にあわてる事のないように、普段から楽器の正しい知識を修得しておきましょう。

楽器の修理調整がうまい人の見分け方を教えましょう。楽器の修理職人をするのに日本ではどんな許可も資格も必要がありません。つまり、いつだれでも自分が楽器職人だと宣言すれば、その時から楽器職人なわけです。もっともイタリアでも楽器修理屋になるには商工会議所に登録して毎年税金をたっぷりおさめるだけですが、ですから人によって修理の技術などまちまちです。人のうわさも、どこまで確かなのかわかりません。それではどのようにしたらいいでしょう？

楽器を修理、調整するときは、納得がいくまで内容を尋ねること。難しすぎてわからなかったり、疑問が残っていれば、その日は楽器をもって帰って、勉強しましょう。できれば信用のできる英語などの本や雑誌（よく修理や調整についての記事も書かれている）を読んでほしい。専門書や"Strad" や "Strings" (注・日本の雑誌の「ストリングス」ではありません) など。あるいは他の修理屋の話聞いてみるなど、下準備をしてから出直すこともできます。経験豊かで優秀な職人は楽器に対しての知識を惜しむことなく話してくれるでしょう。

元の話に戻りますが、まず、楽器自体の構造にひずみの出てきた場合。例えば、ネックが下がってきたり、ペグの回り方が悪くなってきたりした場合は、ネックを上げたり、駒を削ってあわせたり、ペグを削ってあわせたりします。また、演奏家の好みによる調整というのがあります。駒のカーブや、駒の高さ、弦の間隔など、演奏家の希望により、ジャストフィットした調整を行うことがあります。この場合、楽器の特性もよく考え、多くの問題が起こらない範囲内で調整を行います。そして、楽器の可能性をより引き出すための調整というのがあります。例えば、魂柱の位置を変える、魂柱の太さや長さを変える、駒を薄くする、又は厚くするなどといったことです。これには多くの難点があります。というのは楽器の音を言葉で表現するのは不可能に近く、意志が間違っただけで伝わってしまうこともありますし、また演奏する環境によって音が変わることも考慮に入れなければなりません。そのうえ音の好みは人によってまちまちです。

日本人はヨーロッパの人々に比べてずいぶん異なった感覚をもっています。もっとも、同じイタリアの中でも地方によって好みの傾向が微妙に違っていたりすることは大変興味深いです。（私は言語-方言も含めて- にその一因があると確信しています）。私はイタリアでヴァイオリンの演奏家でもあった都合上、友達の楽器の調整を毎日やっていました。彼らはオープンな性格で、機関銃のようにしゃべりまくりますが、建て前がなく本音と冗談を入り交じえた会話なので、とても楽しかった事を今でもなつかしく思い出します。日本では質問しても、仮面をかぶった人が多く、調整しても本当に満足してもらったのだろうか？と疑問に思うことが多く、残念です。というわけで、調整する人の独断と偏見による調整にならないためにも、演奏者の積極的な主張が必要になります。

恐ろしいことに日本では閉鎖的なお国柄が、間違っただけの知識があふれています。先生の言うことを無条件にすなおに受けとめることが良いことだと考えられている習慣が日本にまだ残っていること事態が異常だと思います。たとえば疑問があれば複数の人に質問しましょう、答えがまちまちだったりするでしょうが、その中で間違いを見つけていくことが正しい知識を得ていくうえでの第一歩です。自分の大切な楽器は（財布も含めて）、ひとまかせにせず自分で守るように心がけましょう。

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作



イチイ ヒロキ

Violin Workshop



〒602-0825 京都市上京区寺町通今出川上ル表町31
Tel. 075-251-0724 Fax. 075-251-0726
e-mail: hiroki@violin-workshop.com
<http://www.violin-workshop.com>

弦楽器の基礎知識

7) ラベル

ヴァイオリンやチェロの胴体の、ちょうど向かって左のf孔から中をのぞき込むと見える位置に、その楽器の製作者のラベル（フランス語で Etiquette とも言います）が貼ってあるのをご存知でしょうか。楽器にラベルを貼る習慣ができたのは16世紀にさかのぼります。

信頼性はともかくとして、存在しているラベルでもっとも古いものはクレモナの有名なアマティ家のある人物の名前、製作年と製作場所が書いてあります。当時は演奏家や貴族がそのラベルを見てはるばる演奏家が楽器の注文にやってくるといった重要な宣伝広告の役割をしていました。Cremonaの黄金期と言われている17・8世紀には、Cremonaの著名な作家の楽器は、高い値段で取引されるようになってきました。有名なアマティやストラディヴァリやガアルネリなどもこの頃の人です。数多くの偽作品が世の中に出始めたのもこの頃でしょう。Antonio Stradivariの息子に当たるFrancescoとOmobonoも父の死後数多くの楽器に父親のラベルを貼っています。こうしたほうが、楽器が高く売れたからです。

お持ちの楽器のラベルが本物が偽物かという心配は不必要なことが多いでしょう。楽器の価値を考慮するときには、ラベルは単なる飾りの付属品くらいに考えてください。もっとも、銘器においては本物のラベルが貼ってあるに越したことはないのですが・・。

ときどき偽物のラベルが貼られていることを悪質な行為と受けとめる人もありますが、残念ながら弦楽器のラベルは食品や革製品の品質保証書ではないのです。本来ラベルは楽器の価値を左右するものではなく、弦楽器に関して完全に偽ラベルを取り締まることは不可能です。

著名な楽器には鑑定家によって証明書が付けられることがあります。しかし、鑑定家の間においても真偽の意見の分かれることもあります。ひどいのは、楽器の鑑定をする事自体を商売とし、安易に偽物の鑑定書を作製する人もいます。

どれを買ったらよいのか自信がないときは自分で楽器の善し悪しを正確に判断できるようになるまでは、とても高価な楽器には手出しせずに、材料、構造的、音響的にも完全で、そして値段も手頃でラベルも正真正銘の現代の優秀な楽器製作者によって作られた楽器で満足しておくことを私はおすすめします。

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作



イチイ ヒロキ

Violin Workshop

〒602-0825 京都市上京区寺町通今出川上ル表町31
Tel. 075-251-0724 Fax. 075-251-0726
e-mail: hiroki@violin-workshop.com
<http://www.violin-workshop.com>



弦楽器の基礎知識

8) 楽器の値段

たった一台のヴァイオリンの値段がケース弓付きで数万円であるかと思えば、1億円を下らない楽器も多数存在することを
ご存じだと思います。楽器の値段がどのようにして決まるのかということは誰しも興味を持つことだと思います。一般的に音
のいい楽器がそれなりの値段が付いてくると考えられですが、必ずしも比例してないですし、そのように考えると後でとんで
もないような楽器をつかまされるはめになることもあるでしょう。

新作の楽器ですと(楽器工場製の楽器はともかく)本来伝統的に職人によってつくられたヴァイオリンは1台におよそ
160-200時間必要とします。材料費は楽器のために自然乾燥させてある材木が必要であり木目の美しさと寝かせてある年月
によって変わります。楽器の値段は製作者の腕の他にその人の国の事情も影響してくるでしょう。東ヨーロッパや南米又は東
南アジアの作家の楽器は安く入る可能性が多いわけです。

古い楽器の場合は複雑です。楽器の性能を材木の品質で考えると200年前に切られた木の方が繊維が丈夫で、しかも軽くて
楽器として理想的な状態になるため現代物にはない独特の美しい響きを持った楽器が存在するわけです。ただし注意して下さ
い、これらは楽器そのものが良く製作されていてしかも保存の状態が良ければの話です。多くの場合、割れやひびが入って修
理されていたり、ニスも塗り直されていたりする事があります。これらの修理が腕がよくて、正しい知識を持った人たちの手
で行われていればいいのですが、必ずしもそうとは限りません。そして表板や裏板の魂柱の所にひびが入った楽器、これらの
楽器は正しく修理されていたとしても本来の半分程度の価値しかないと考えて良いでしょう、ましてひどい修理がされていた
ならごみに等しくなります。

あとは芸術作品としての価値、これが大きく楽器の値段を上げている原因です。もともと音のよい楽器が値段の上下に
関与してきたはずなのですが、実際には状態が悪くもう使用に耐えなくても博物館に飾られているような絵画のように恐ろし
く高い値段が付くことも頻繁にあるわけです。こうなってくると楽器の価値観は人それぞれに基準が変わってきますが、楽器
の値段の基準としてよく注目されるのがオークションの落札価格です。海外の著名な雑誌である Strad や Strings によくて
ます。これらの楽器が楽器屋に並ぶときはヨーロッパでも税金や手数料など面倒な費用もかかるので最終的な価格は落札価
格より2倍くらいに膨らんでいることも多いでしょう。オークションに行くのに特別な資格があるわけではないのでだれでも
行って買うことは可能です。音楽家が自分のための楽器を直接競り落としていくことも珍しくありません。でもオークション
なら楽器が安く手にはいると単純には考えないでください。自分で値段を付けるわけですから後悔しても後の祭りです。最近
ではインターネットオークションで楽器を落とされた方もよく見かけるようになりました(オークションといっても先程述べ
たオークションとは全然関係ないです)結構安く良い物を買われた方もありますが、気の毒な人では状態の良くないぼろ楽器
を、イタリア製の良い楽器と信じて買っていた人もいました。

19世紀から20世紀にかけて東ヨーロッパでは大量の楽器が生産されています。物は雑につくられている物が多いのですが
中には結構よくできているのも見かけます。このような楽器の中でも、良質の楽器がイタリアの青空市場のような場所でべら
ぼうに安く売られていることもまれにありました。この手の物は盗品か遺品で誰も価値に気づいてないかでしょう。

残念なことに日本では、楽器の値段が安いとそれだけで品質も性能も悪いと思い、より高価な楽器を購入している人を時々
見かけます。値段にとらわれずその楽器の性能をきちんとみきわめる目を持つことが大切だと思います。

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作



イチイ ヒロキ

Violin Workshop

〒602-0825 京都市上京区寺町通今出川上ル表町31
Tel. 075-251-0724 Fax. 075-251-0726
e-mail: hiroki@violin-workshop.com
<http://www.violin-workshop.com>



弦楽器の基礎知識

楽器の取り扱いについて最重要項目

ほかのページは読み流しても、このページの内容だけはみなさまの楽器のために注意して読んでください。

1) ニスのトラブル

量産品の安い楽器などは比較的丈夫なニスが使われていますが、特にイタリア製の楽器などは柔らかくもろいものです。楽器を守るといふ点では丈夫な方がよいことは間違いありませんが、現代の家具などに使われているような堅いニスだとガラスのような耳障りな音になります。もっとも堅さだけの問題ではなく、いろいろな要素が関係しあいます。

いずれにせよ楽器の性能上特殊なニスが使われているのです。つまり家具のつもりでごしごし磨くとニスに傷が付いたりニス自体がはげていったりします。また松ヤニで汚れた布などを使うと、きれいにするつもりが逆に楽器に松ヤニをつけていたりするわけです。

また熱にも弱く車内においておいたりすると、ニスが柔らかくなりケースにくっついたり表面が汚くなったりすることもあります。春や秋でも車の中はあつくなりやすいので決して車内に楽器を放置することは禁物です。

2) 掃除の仕方。

綿100パーセントの布（合成繊維が入ってないもの、使い古しのTシャツの切れ端などで十分です。新品はのりなどが付いているので良くないことがあります）を2枚用意していただいて、1枚は駒の周りなど松ヤニつき専用に使ってください。また頻繁に新しいのに変えてください。洗っても松ヤニはきれいにとれません。また楽器磨きように市販されている液体等はおすすめできません。（理由はニスのページにて）

3) 駒のトラブル

駒は弦の圧力だけでたってます。調弦などで少しずつ傾いていきます。こまめに傾きをなおしていないと駒が曲がってしまいます。さらに放置すると倒れたショックで楽器にひびが入ったりと、とんでもないことになることもあります。下の図のように正しい角度で立っているかこまめにチェックしてください。特にゆるんだ糸巻きを締め直したときは要注意です。

